様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月 １０ 日現在

機関番号：３４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２２２１

研究課題名（和文）インド・チベット論理学相互理解のための基礎資料の構築

研究課題名（英文）Construction of basic research tools for mutual understanding of Indian and Tibetan logic

研究代表者
福田　洋一（Fukuda, Yoichi）

大谷大学・文学部・教授

研究者番号：００１８１２８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、初期チベット論理学において重視されたダルマキールティの第二の主著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』に対するチベット人の註釈書9点のうち、ゲルク派興起以前のもの8点のチベット語テキストをコンピュータに入力して公開し、またそれらの中から詳細な内容目次を抽出・整理して提供した。これによってインド論理学の研究者にとってもチベット論理学の研究者にとっても、それぞれの研究テーマに裨益する研究資料を提供することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　ダルマキールティの第二の主著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』のインドでの註釈書はダルモーッタラのものしかなく、また極めて膨大なため、詳しい内容の研究にも時間がかかる。それに対してチベット人の註釈書は9点を数え、これらを参照することによって原典の理解に有益な資料となる。また初期チベット論理学はこの『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』の研究によって形成されたため、その資料は初期チベット論理学の解明にも必要不可欠の資料である。これらの注釈書を電子テキストにて提供することにより、困難な写本読解の手間を省いて、内容そのものの理解に直結する研究資料を提供することが出来た。

研究成果の概要（英文）：In the early Tibetan logic of the Pre-Gelug-pa period, nine commentaries on Dharmakirti’s Pramanaviniscaya (his second most important work) written by Tibetan scholar-monks. On the basis of its studies they established their original logic. This research project inputted those commentaries and their detailed analytical contents (sa-bcad) into the computers and released them in our research web site. This web site also provided a cross-search system of almost all logical works of pre-Gelug pa period. These tools will be usefull for not only the scholars of Tibetan logic but also those of Indian logic.

研究分野：仏教論理学

キーワード：『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』　チベット論理学　カダム派

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

現在、チベット寺院で伝承されているチベット論理学は、インドの仏教論理学をベースにしながら独自の発展を遂げたものである。その基礎は、11 世紀から 15 世紀初頭ゲルク派が成立するまでの間、カダム派のサンプ僧院を中心に形成された。従来、この時期の資料は失われ、後代の著作における引用を通して知られるのみであった。しかし、2002 年にラサのデプン寺から多数の古写本が発見され、そのうちカダム派の諸著作が 2006 年以降『カダム全集』として 120 巻影印版で刊行された。そこに初期チベット論理学の成立と展開に寄与したゴク（1059–1109）、チャパ（1109–1169）、ツァンナクパ（12 世紀）、チョンデンリクレル（1127–1311）の著作のほか、著者不明の論理学書も含まれており、これまで見ることのできなかったチベット論理学草創期の多数の著作を直接読むことができるようになった。ただし、それらの写本は草書体で書かれ、また影印版の撮影のミスや印刷の不鮮明さ、写本の状態の悪さなどもあって、判読が極めて難しいものであり、そのため初期チベット論理学の研究はなかなか進まなかった。

そこで研究代表者福田と研究分担者石田は、2014～2016 年度に科学研究費補助金基盤研究(C)「初期チベット論理学の成立史解明のための基礎研究」において、主要なチベット論理学書 をチベット人研究者・留学生の力を借りて電子テキストに入力し、全文の横断検索サイトを構築した。また主要な文献については入力したテキストをダウンロードできるようにした。

一方、インド論理学の研究状況として、新たなサンスクリット語原典が見つかり、刊行されるようになった。とりわけインド論理学の大成者ダルマキールティ（600–660）の第二の主著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』のサンスクリット原文の出版は大きな成果である。それはインド論理学にとって重要であるばかりではなく、初期チベット論理学が主に同書を基礎に形成・発展したことから、チベット論理学研究にとっても大きな意味を持っていた。

２．研究の目的

本研究の目的は、ダルマキールティの第二の主著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』に対するチベット人の注釈 8 点を電子テキストに入力し、さらにその詳細な内容目次（科段）を抽出・整理し、いずれも Web サイトで公開することにある。また前科研費事業で作成した横断検索の資料としても提供する。

『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』に対するインドの注釈はダルモーッタラ（750–810）の浩瀚なものと、後代のジュニァーナバドラ（11 世紀、インド人の翻訳者、詳細は不明）の注釈があるだけなのに対し、ゲルク派興起以前のチベット人の注釈書は 8 点確認されている。すなわち、

1. ゴク・ロデンシェーラプ (1059−1109)
2. チャパ・チューキセンゲ (1109−1169)
3. ツァンナクパ・ツォンドゥーセンゲ (12C)

という初期カダム派のサンプネウトク寺での伝統の中で書かれたもの、

4. チュミクパ・センゲペル (13C)
5. チョンデンリクレル (1227−1305)

というナルタン寺の伝統の中で書かれたもの、そのナルタン寺と関係は深いが系統としてはサキャ派にも関係を有している

6. プトゥン・リンチェンドゥプ (1290−1364)

の注釈、その他、年代不明の

7. チャンチュプセムパー・ジュニャーナシュリー
サキャ派の系統らしい
8. ポトン・ジャンペーヤン・ショレワ
のものの 2 点がある。

いずれの注釈も他の著作よりもページ数が多く、初期のチベット論理学が『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』読解に基づくものであったことを如実に物語っている。

これら『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』のチベットにおける注釈書が、初期チベット論理学の形成過程にとって重要な意味を持っているのは言うまでもないが、インドの注釈書がほぼ 1 点しかないことから、『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』研究にとっても重要な資料と言える。

本研究課題では、これらゲルク派以前のチベット人による『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』注釈書をすべて電子テキストとして入力してオンラインで提供することを目的とした。またすべて同じ形式で入力することにより、全体の横断的な検索を可能とする。さらにチベット人の注釈書には、細かく区切られた詳細な内容目次（科段）が本文の中に埋め込まれている。これらは著作全体の構造や、個々の偈の位置づけなどを反映したものであり、チベット人注釈者の解釈を端的に示すものである。これは原典の読解にも極めて有用である。しかし、本文の中に埋め込まれたままでは、その構造性を理解したり、必要な箇所の目次として利用したりすることはできない。そこでこの科段を抽出し、その階層構造を整理して示せば、必要な箇所にすぐにアクセスすることができる。チベットの注釈 8 点のうち、主要な 6 点（ゴク、チャパ、ツァンナクパ、チョンデンリクレル、プトゥン、ポトン）の科段を別に抽出整理した。これもオンラインで利用することができる。これらによって、『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』の読解にも、また初期チベット論理学の形成史の研究にも有効な基礎資料を提供する。

３．研究の方法

まず、『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』の注釈に絞って、カダム派のみならずゲルク派興起以前の未入力の注釈書を電子テキストに入力する。

次に主要な 6 点の注釈書の科段を抽出し、整理する。本研究で扱う初期の論理学書の科段は必ずしも完全な形では作られておらず、前後一致しないところも少なくない。科段と箇条書きの区別も難しい。これら難解な箇所をチベット人研究者と協力しながら、できるだけ一貫した科段を作成する。また、そこから原典のチベット語訳テキストとの対応箇所もできるだけ調査する。

検索サイトのプログラムを修正し、より利用しやすいように、検索結果からチベット語テキストへ飛べるようにする。

４．研究成果

本研究課題の最終的な成果は、研究代表者の作成している Web サイト（https://tibetan-studies.net/earlytibetanlogic/）にて公開している。そこには、2014～2016 年度の基盤研究(C)「初期チベット論理学成立史解明のための基礎研究」及び今回の 2017～2019 年度の基盤研究(C)「インド・チベット論理学相互理解のための基礎資料の構築」、カダム派の論理学に対して批判的な立場を取ったサキャ派の論理学書の電子テキストおよび横断的検索の機能などを掲載している。

また、研究代表者福田は、初期チベット論理学において最も関心の持たれたテーマである、mtshan nyid、mtshon bya、mtshan gzhi という三つ組みの概念についての考察を深めた。これら三つの概念に対する日本語の適切な訳を提示することは難しいが、とりあえず、その順序に

「定義的特質」「被定義項」「定義基体」と訳しておく。もともとサンスクリット語では、「被定義項」と「定義基体」は同一の単語であり、そこでは「定義的特質」にあたる lakṣaṇa と、定義対象にあたる lakṣya という主客の二項関係を表す概念であったが、これが三項関係になることで、チベットではサンスクリット語のテキストに見られない独自の意味を発展させた。それは論理学に限られず、他の一般の教義的な文献でも頻繁に用いられる用語となった。これについて、初期のチベット論理学者は、おそらくはその概念の形成過程であったため、多くの著作において、その冒頭付近で詳細な議論を展開している。

しかし、その議論内容は極めて難解であり、しかもその後のゲルク派の論理学では継承されることなく廃れてしまったものであるため、議論の流れを把握することも困難であった。福田はすでに 20 年以上、このテーマに取り組んできたが、なかなか理解の進展は得られなかった。今回は、サキャ派のサキャ・パンディタがカダム派の論理学を批判するために著した『量・正理の蔵』の当該箇所を読解し、もともとのカダム派のテキストでは難解であったものを、サキャ・パンディタが要点を捉えて批判しているテキストを元に、これら三つ組みの概念の意味を把握することを試みた。その成果は、「サキャ・パンディタ著『リクテル』における mtshan nyid の mtshan nyid の研究」（『大谷大学研究年報』第 72 集 59〜119 ページ）に発表した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 福田洋一	４．巻 66巻2号
２．論文標題 初期チベット論理学におけるmtshan nyidのmtshan nyidを巡る議論	５．発行年 2018年
３．雑誌名 印度學佛教學研究	６．最初と最後の頁 761-755
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.4259/ibk.66.2_761	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 崔境眞	４．巻 66巻2号
２．論文標題 ゴク翻訳官の『難語釈』における確定（yongs su gcod byed）	５．発行年 2018年
３．雑誌名 印度學佛教學研究	６．最初と最後の頁 774-769
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.4259/ibk.66.2_774	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 福田洋一	４．巻 72
２．論文標題 サキャ・パンディタ著『リクテル』におけるmtshan nyidのmtshan nyidの研究	５．発行年 2020年
３．雑誌名 大谷大学研究年報	６．最初と最後の頁 59-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 福田洋一
２．発表標題 ツォンカパのラムリム思想の成立過程について
３．学会等名 日本印度学仏教学会学術大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 福田洋一	４．発行年 2018年
２．出版社 大東出版社	５．総ページ数 382頁
３．書名 ツォンカパ中観思想の研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

研究成果公開サイト：
Research on the early Tibetan logic : 初期チベット論理学研究
https://fukuda.tibetan-studies.net/earlytibetanlogic/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	石田　尚敬 (Ishida Hisataka) (80712570)	愛知学院大学・文学部・准教授 (33902)	
研究協力者	崔　境眞 (Choi Kyeongjin) (30785415)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・特任研究員 (12601)	